別紙様式1　　令和4年度学校評価表　　（中間　最終　）　　学校名　三原市立小泉小学校　　校番（　14　）

a　学校教育目標	学びに向かい，心豊かで，健やかな児童の育成 ～「かしこく」「やさしく」「たくましく」～	b　経営理念 ミッション・ビジョン	【ミッション】（自校の使命） 自分を愛し，夢を語る児童の育成 【ビジョン】（自校の将来像） 「通ってよかった」「通わせてよかった」と誇りに思われる学校

評価計画						自己評価					改善方策	学校関係者評価			
	c　中期経営目標	d　短期経営目標	e　目標達成のための方策	f　評価項目・指標	g 目標値	10月 h 達成値	2月 h 達成値	i 達成度	j 評価	k 結果と課題の分析	n 改善方策	l　評価 イ	ロ	ハ	m コメント
確かな学力	確かな学力の育成 〈かしこく〉	授業力の向上	○ものの見方・考え方の育成を図る本質的な問いの設定 ○思考力，表現力を高める児童コーディネート力向上と「話型」の効果的活用 ○資質・能力と連動した「振り返り」の充実 ○ICTの効果的な活用を目指した授業改善 ○定期アンケート評価による成果と課題の把握，分析，改善策検討	○本質的な問いを設定した単元において，単元末の「振り返り」における児童のものの見方，考え方の見取りB評価以上の児童 ○児童が1単位時間の中で活躍する場を計画的に設けた研究授業の実践 ○1・2学期末に振り返りの交流実施 ○1・2学期末にICTの効果的な活用法の交流実施	7月80% 12月85% 2月90%	89.0%		111.2 %	A	本質的な問いを設定した単元において，単元末の「振り返り」における児童の見方，考え方の評価B以上の児童については，現在進めている単元の最後に振り返りを書く時間を設け，評価を行う。 児童が1単位時間の中で活躍する場を計画的に設けた研究授業の実践については，授業者の自己評価の結果，67%であった。授業を進める中で指名計画を立て，児童の意見を引き出していくことが難しかったと考えられる。 1・2学期末に振り返りの交流，ICTの効果的な活用法の交流を行うことについては100%達成できた。担任者会の場で各学年の状況を確認したり，ICTの活用について意見を交流したりすることができた。	児童が授業の中で活躍することができるように，授業の中で児童の考えを見取り，どのように意見をつないでいくべきかを，教師が構想する必要がある。教師がファシリテーターとして児童の考えを引き出したり，繋げたりすることができるように，研修を行い，実践していくようにする。 振り返りやICTの交流については，各学年の取組状況をよりこまめに交流し，参考となる取組を学習に取り入れていくようにする。	3	0	0	○基礎学力の定着において，特に算数科の課題が明らかになっている。低学力の児童への根気強い，学校組織としての取組を引き続きお願いする。 ○算数科の，中位の児童の課題を明らかにして取り組んでほしい。 ○高学年には中学進学を想定し，家庭学習の質や量を増やすことをお願いしたい。特に，指示されたことだけでなく，「自主的な学習」をさせてほしい。 ○今後も児童が自己表出を経験する場を設定し指導していただきたい。
		基礎学力の定着	○学力向上週間の計画的，効果的実施 ○計画的，効果的なドリルタイムの実施 ○家庭学習をやり切らせる指導とICT活用による家庭学習の実施 ○学力向上に向けた計画的，効果的な取組の実施及び個への支援手立てと授業改善策の検討 ○学力調査40ポイント以下の児童への手立ての充実	○単元末テスト「思考・判断・表現」のポイント　85%以上 ○NRT学力調査において，各学年，学力改善シートで提示した目標数値を達成した学級 ○全国学力調査において，学力改善シートで提示した目標数値を達成した児童の割合	85%以上	83.5% 85% 45%		98.2% 100% 52.9%	B A D	○単元末テスト「思考・判断・表現」の達成度については，国語科，算数科，理科の平均が 83.5%であった。算数科のみの平均が78.8%であり，課題が大きかった。 ○NRT学力調査において目標値を達成した学級は85%（11/13）であった。国語科，算数科についての対策を昨年度から重点的に行ってきたため，全学年目標値を達成することができたと考えられる。 ○全国学力調査において目標値を達成した児童は45%であった。特に算数科の課題が大きかった。	○夏季休業中に行ったNRTの結果分析を基に，重点課題領域についての授業改善を図り，児童に学力をつけていく。また，算数科の思考力の課題が特に大きかったため，思考力を高めることを目的とした問題を，ドリルタイムの中に意図的に組み込んでいくようにする。 ○来年度もNRTにおいて目標値を達成できるように，週3回のドリルタイムにおいて，課題の大きい領域を中心に対策していくようにする。また，理科についても，アシストシートを活用した対策を行うようにする。 ○全国学力調査の結果を基に考えた授業改善の計画を，各学年で実施していき，課題であった領域の学力を高めることができるようにする。	3	0	0	
豊かな心	豊かな心の育成 （優しく）	ふるさとを愛する心情の育成	○一校一貢献をゴールとした生活科，総合的な学習の時間を中心とした「地域貢献活動」の効果的実施 ○学期毎に取組内容の効果の検証，改善策検討	○学校アンケート「小泉の地域が好きですか」肯定的評価4の児童の割合	85%	89.0%		#####	A	○学校アンケート「小泉の地域が好きですか」の肯定的評価の児童は89%であった。 ○1・2年生「さつまいもの苗植え」や5年生「農作業体験」など，各学年が生活科・総合的な学習の時間に工夫をしながら地域に密着した学習活動を行った成果と考えられる。 ○前年度末のアンケート結果から数値が7%減少しており，小泉町の魅力を実感することができる学習活動が不足していることが考えられる。	○各学級担任を中心として，学習活動の改善を常に意識し，児童が自ら学びたくなるような内容にしていく。また，小泉町の良さを学ぶ際には，ある1つの面だけから注目するのではなく，人・もの・ことなどから，多面的に捉え，魅力を実感できるような学習活動を児童の発達段階に応じて行っていくことで，児童の「ふるさとを愛する心情」を醸成する。	3	0	0	○学校生活や友人関係への児童の思いを把握するために，個人面談を増やしたり，自己肯定感を高める方策をさらに講じたりする中で，学校生活への満足度を挙げていくことが必要である。 ○三原愛，小泉愛をもつことのできる子どもたちを育成するために，地域を含めた取組を継続していってほしい。 ○児童会活動を通して，リーダーの育成を図ってほしい。
		「小泉小5つの宝」の継承	○「小泉小5つの宝」（①ほかほか言葉②時間を守る③トイレのスリッパ揃え④気持ちのよいあいさつ⑤静かな廊下歩行）の児童による取組推進及び改善実施 ○ハイパーQUや定期アンケートの評価による成果と課題把握，分析，改善策検討	○「小泉小5つの宝」のうち生徒指導部の設定した重点項目を用いた重点強化週間振り返りにおける児童の肯定的評価 ○ハイパーQU　（6月中旬，1月下旬）分析による学級生活満足群の割合で評価	85% 60%	96% 64.5 %		112.9 % 107.5 %	A	○重点項目に「気持ちの良いあいさつ」と「ほかほか言葉を使う」を設定し，毎学期強化週間を設定することで，児童は高い意欲を持って活動に取り組むことができた。実施した児童アンケートの肯定的評価は，それぞれ「気持ちの良いあいさつ」が97%，「ほかほか言葉を使う」は96%であった。 ○第1回ハイパーQUにおいて学級生活満足群の割合は64.5%であった。学年別に見ると1年生の二次支援が必要な児童が63%と非常に多く，他の学級では，去年に引き続き同じ児童が支援を要する場合が多くあった。新しい環境への不安や戸惑いなどの気持ちに寄り添っていく必要がある。	○「小泉小5つの宝」に，多くの児童が意欲的に取り組むことができているが，強化週間等の取組から期間が空くと，意識が薄れている場合も見受けられる。児童会が主導して，より意欲的に取り組むことができる活動を考え，実行していく他，生徒指導部からの全体指導や学級担任の継続的な指導が行われるように，教員の意識を統一して児童への指導を行っていく。 ○学校生活満足群に属さなかった児童の原因を明らかにするとともに，児童が安心して学校生活を送ることができるように，学校内で，きめ細かい情報共有を図り，児童への支援を学校全体で行っていく。	3	0	0	
健やかな体	健やかな体の育成 〈たくましく〉	運動意欲の向上	○アンケートの結果分析による課題分析をし，取組内容の決定と実施 ○体育科における運動遊びの実施 ○休憩時間等を活用した学級遊びの取組実施	○運動やスポーツが好きな児童の割合 ○積極的に外遊びをする児童の割合	1学期80% 2学期85% 3学期90%	88% 72%		110% 90%	A B	○「運動やスポーツをすることが好きですか」の肯定的評価の児童の割合は88%であった。1学年を除き，各学年に数名ずつ，否定的な回答をする児童が見られる。 ○「積極的に外遊びをしている」の肯定的評価の児童の割合は72%であり，やや目標値を下回る結果となった。全く外遊びを行っていない児童の割合も10%となっている。コロナ禍で減少した児童の運動機会を確保していくことが課題であると考えられる。	○体育科の授業の冒頭で行っている運動遊びを継続していき，児童が楽しみながら，様々な運動遊びに触れることができるようにする。 ○感染症対策を考慮したうえで体育朝会を実施し，児童が運動をする機会の保障を行う。また，月に一度，3学年合同で運動遊びを行う機会を設け，異学年で一緒に運動する楽しさを味わわせるようにする。 ○学級遊び等を充実させ，児童が日常的に外遊びしたいと感じることができる取組を進めていく。	3	0	0	○コロナ禍であっても，体を動かす楽しさを味わわせる取組を継続してお願いする。
		体をつくる	○食に対する感謝の気持ちを醸成する指導，取組実施 ○給食を食べ切る分量の自己決定と完食しようと努力する児童の育成	○栄養職員と養護教諭による栄養指導を各学年年1回以上行う。 ○学校アンケート「給食は自分で決めた分量を食べていますか」の肯定的評価	100% 90%以上	0% 88.3 %		0% 98.1 %	D B	○コロナの感染状況により，外部講師を招聘しての指導を計画することが難しかったため，栄養指導は実施できていない。 ○食材や作ってくれた方への感謝の気持ちを持ち，残さず食べきろうとする気持ちを育てることを目標に「ばくばく給食週間の取組」を実施した。この取組により，自分で決めた量を食べている児童は88.3%であった。苦手なものを食べる工夫について，各クラスで交流し，完食の木の取り組みをする事で完食意欲が高まった児童は93.5%だった。	○児童の中には，苦手な食べ物が食べきれない，ダイエットのために食べる量を減らしている児童もいるため，2～3学期に栄養職員と連携を図り，バランスよく食べる事の大切さや，ダイエットの危険性について考えさせる栄養指導を実施する。 ○保健体育委員会の子どもたちに，残菜を減らすアイディアを考えさせた。この児童のアイディアを学校全体の取組に活かすことによって，完食の意識を高めていく。	3	0	0	○地産地消の観点から食育教育を進めてほしい。 ○毎年ルーティンで行っている教育活動（栄養指導）等は，学校評価の評価項目としては適さない。
信頼される学校	信頼される学校づくり 〈つながる〉	活用する	○開発した地域の教材，施設の効果的活用 ①地域教材の活用と施設との交流（含リモート） ②ゲストティーチャーの招聘と活用（含リモート）	○地域，施設，人材の活用を，学期に1回以上した学年の割合	100%	66.7% （4/6）		66.7%	C	6学年中4学年は，直接地域の方とふれあい交流することができた。 第3学年は，特別支援学校の生徒さんと交流予定だったが，感染症の拡大防止のため，交流はできなかった。しかし，お互いの学校を子どもたちが紹介するビデオを作成しあい見合うことはできた。	可能な限り，直接地域の方との交流を行い，ふるさとの良さに気付かせ，ふるさとを愛する心情を育てていく。2学期には，小泉病院のソフトボールチームの皆さんをお招きして交流会をもつ。PTAのご協力も得ながら，今後も地域との交流活動を実施する。	3	0	0	○今後も積極的に地域と連携して，学校運営を行ってほしい。
		発信する	○学校便りの定期的な発行とPTAを活用した地域への配付 ○学年便りや学年の教育活動の様子のHPアップ ○一校一貢献の取組の学期1回以上のHPアップ	○保護者アンケートにおける「学校は保護者の願いに応えた教育を行っていると思われますか」の肯定的評価	90%以上	95.8%		#####	A	学校便りは毎月発行し，すぐーるで配信をしている。夏季休業や発行日の関係で地域への回覧が，毎月できずまとめての回覧となった月もある。 学校便りや，学級便りは，HPにUPしないことになっているため実施できなかった。	学校便り，学年だよりはHPにはUPしないが，「連絡システム　すぐーる」を活用して，毎月1回以上配信することによって，児童の学校での様子を保護者に発信する。 また，一校一貢献のHPへのUPも12月に実施する。	3	0	0	○学校教育の見える化を，今後もさらに実施していただきたい。
		組織の活性化と効果的な教育活動推進	○学校経営会議を核としたベクトルを揃えた取組実施 ○各部会（研究推進部，生徒指導部，保健体育部）における進捗管理とPDCAサイクルの活用による改善策の検討実施 ○担任者会における教職員の交流による取組の円滑な遂行 ○学校経営会議，三部会等を活用，教員の業務改善案を取り入れた業務改善の推進	○「効率的な働き方ができている」「児童と向き合う時間が確保できている」教職員の肯定的評価	100%	75% 100%		87.5%	B	教職員アンケートの結果，効率的な働き方については経験の浅い職員を中心に否定的な回答が見られた。これには，見通しがもてないということが起因している。 子供と向き合う時間は，全ての職員が確保できていると回答している。	経験の浅い教職員を，学校体制で支え，見通しをもって業務に当たることができるようにする。現在も，教職員がお互いに声を掛け合うことができている。この同僚性を，小泉小学校の職員文化として今後も取組を進める。 また，子供と向き合う時間の確保と，職員の休憩時間の確保を両立していくことも重要な課題であると考える。今後も，職員が健康でやりがいをもって働くことができる職場づくりに努める。	3	0	0	○教職員の心のゆとりが子どもとのゆとりある関わりにつながると思う。 ○評価指標が職員の意識調査の結果となっているが，もっと客観的なデータをもって評価すべきである。

【j：自己評価　評価】
A：100≦（目標達成）　B：80≦（ほぼ達成）＜100
C：60≦（もう少し）＜80　D：（できていない）＜60

【l：学校関係者評価　評価】
イ：自己評価は適正である。　ロ：自己評価は適正でない。
ハ：分からない。